

9月4日 “*imagine*” と *create*

午前中は Vilas Nitiwattananon 先生のごみ問題に関する話を聞いた。ごみマーケットの話が面白かった。ごみを学校で集めて分別しそれをリサイクルショップの人に買い取ってもらい、子どもたちの小遣いにしたりするという事業で、子どもたちにきちんとお金を還元しているのが良いと思った。達成感も出るし小遣い稼ぎというインセンティブが働いてきかけとしてもやりやすい。また、ゴミをたくさん集めたりゴミをたくさん売ったりした人には表彰され、お金ももらえる。

講義後、APTU 内の食堂でご飯を食べ、午後は明日のフィールド調査に向けたディスカッションをガービッジ班は行った。だが、明日のことについて特に何も考えておらず、立命館の班員が何をしてくて何をしたいのかもよくわからなかったため、チャイワン先生の講義を見に行った。80 パーセントの割合でタイ語だったのでチャイワン先生は「聞きながら想像してね」と言っていた。授業では生徒がスラムについてフィールド調査をしたものをパワーポイントにまとめて発表して、それにチャイワン先生が解説を加えるというものだった。発表は二つあり、一つ目のものはスライドに英語を載せてあったのでいくらかはわかった。この発表グループはスラムの人々に出身、年齢、仕事、家賃を数人に聞いて調査していた。家賃を入れているのが意外だったが、スラムの人々にとって家というものが大事なのかなあと考えた。たしかに家があると雨風をしのげるし、プライベートな空間を設けることもできるし、物を盗まれる可能性も野外で暮らすよりは低くなるかもしれない。この発表で気になったのが、スラムの人から罵られたり、トラブルを起こしたりしなかったのかということだった。ほかのルポライターの本などを読んでいても気になるのだが、ルポを書ける身分や学生という衛生・便利さ・快適さ・経済・社会的地位などの面でスラムに住む人々よりも「良い暮らし」をしている人間がスラムや貧困層の人々と会い、話をし、なにかしらの調査をするときに、いろんな面で「良い暮らし」をしている人間を羨んだ貧困層の人々から反感を買うことがないのだろうかということが気になっていた。自分自身、乞食をしている人に対して同情をするのだが、その人に僕がお金や物をあげるときに何か「上から目線」のようなものを自分に対して感じる。そしてその「上から目線」で人に相対しようとしている自分が気持ち悪い。何様のつもりだよって言いたくなる。そうゆう考えも有って、スラムの人々にインタビューをする際にトラブルなどがあつたかどうか質問をすると、発表した生徒からは「ここはまだマシなスラムだからそれほどやっかむ人もおらず、トラブルもなかった」という答えが返ってきた。なるほど、ある程度の格差なら心情として許せるのかもしれない。二番目の発表のグループはタイ語のスライドで、英語もほとんど使われていなかったので「想像」するしかなかった。

チャイワン先生の授業後には、タマサートの 2 年生のナッターに怒田の紹介ムービーに使うタイ語の字幕を作ってもらった。また、pangさんとeveさんに日本風の名前をつけることになり、pangさんの名前の意味はパウダーということだったので粉雪の感じから「ゆき」

にすることを日本人学生で決めた。Eveさんは彼女の本当の名前（pangもeveも共にニックネームだ）は宝石という意味を持つということだったので、「こはく」にした。琥珀は必ずしも宝石というわけではないが、綺麗だし、響きがかawaiiのでそうした。僕としては「ひすい」も宝石だしかawaiiかなと思ったのだが、満場一致でeveさんのイメージは琥珀の感じだったので「こはく」に決まった。その後、タマサートの学生ごはんに行き、寮に帰った。